



Newsletter

No.35 (2017.8.9 発行)

JAICOWS 2017 年度第 3 回役員会・総会議事録

日 時：2017 年 1 月 21 日（土）11:30～12:30 役員会

13:00～13:30 総会

14:00～17:00 シンポジウム

会 場：青山学院大学 青山キャンパス 総研ビルディング 10 階 第 18 会議室

2016 年度第 3 回役員会報告

総会の前に同じ場所で役員会が開かれました。議事の多くは総会とシンポジウムの準備で総会報告と重なりますので省いて、それ以外のことのみ記します。

出 席：岩井、国枝、田原（事務局）、直井、羽場（会長）、廣瀬（6 名）

議 事：

1. 会計監査の交代について

長年会計監査を務められた馬場房子先生から辞任の意向が伝えられたため、後任の人選を行って、浅倉むつ子先生に依頼することとした。

2. ホームページについて

羽場会長より、現在のホームページを維持しつつ、更新作業が簡易な新規ホームページを開設し、新しい情報をそこに掲載していくことが提案された。渋谷淳一氏（東京福祉大学専任講師）が作成した新規ホームページのモデル画面を役員で確認し、提案が了承された。これまでホームページの更新作業を担当してきた久我和也氏に加えて、渋谷氏にもホームページの作業を依頼することにした。

新しいホームページのアドレスは <http://side.parallel.jp/jaicows/>です。

3. ニュースレターの発行について

ニュースレターは今年、学術会議の会員・連携会員の改選があることから、年 2 回、7 月と 12 月を目安に発行することが確認された。

4. 次回役員会および研究会の開催について

開催時期は 5 月頃とし、研究会における講師の候補を挙げてテーマとともに検討を行った。

5. 今後の活動について

- この間、昨年 25 名、今年 4 名、計 29 名の会員が入会されたこともあり、最新の会員名簿を役員で共有し、役員を増員を検討する。
- 日本学術会議第 24 期の会員・連携会員の推薦期間を前に、JAICOWS 会員宛にメールを送信し、

推薦権をもつ会員に対し女性候補の積極的な推薦を依頼する。

- ・中長期的視野で、研究会をベースにした出版を計画する（JAICOWS の歩み、会員・研究会報告者による寄稿を基に）
- ・日本学術会議ジェンダー政策分科会主催のシンポジウム（女性研究者・大学院修了者・学術関係者の貧困問題）に羽場会長が登壇予定であり、JAICOWS の共催を検討する。
- ・政府や関係省庁等に対し、要望書を提出する（総会終了後の研究会における議論より）

6. その他

廣瀬役員に研究会等のプロジェクト企画及びニュースレター作成サポートを担当していただくことになった。

総会議事録

出席確認：出席者 6 名、総会委任状 46 名、計 52 名（会員数 120 名）

議長：羽場久美子（会長）

議事：以下の各議案について田原淳子事務局長より資料に基づき説明がなされ、承認された。

1. 2016 年度活動中間報告について

(1) 役員会の開催（2016 年 4 月 19 日、同年 10 月 17 日、2017 年 1 月 21 日）

(2) 総会の開催（2017 年 1 月 21 日）

(3) 研究会の開催

第 1 回研究会 2016 年 4 月 19 日 於青山学院大学

・テーマ「においは薬になりますか」

講師 伊藤美千穂（京都大学大学院薬学研究科）

シンポジウム 2017 年 1 月 21 日 於青山学院大学（内容は後に掲載します）

・テーマ「イスラーム女性と国際スポーツ - ヴェールをめぐる葛藤と共存性」

講師 荒井啓子（学習院女子大学教授）

・テーマ「若手研究者養成における課題：

ジェンダー差別と『しかたない』論理の再生産」

講師 福永真由美（東京大学准教授）

(4) ニュースレターの発行（第 34 号）

(5) 会員増に向けた取り組み

第 23 期日本学術会議における女性の会員・連携会員に JAICOWS 入会案内とニュースレター第 34 号を発送（2016 年 12 月）

(6) ホームページの更新

2. 2016 年度会計中間報告について（最終報告を後に掲載していますので省きます）

監査の交代 浅倉むつ子先生に交代することが承認された。

3. 2017 年度事業計画について

(1) 役員会の開催

(2) 総会の開催

(3) 研究会の開催

(4) ニュースレターの発行（年 2 回、7 月と 12 月を目安に発行）

(5) その他

・政府や関係省庁等に対し、要望書を提出する

- ・中長期的視野で出版を計画する（JAICOWS の歩み、会員・研究会報告者による寄稿など）

4. 2017 年度予算案について

2017 年度予算案

1. 収入の部

(単位:円)

勘定科目	2016 年度予算	中間決算	2017 年度予算	備考
会費	590,000	455,000	510,000	102/113 名 (90%)
利子	63	2	63	
その他	0	0	0	
小計	590,063	455,002	510,063	
前年度繰越金	490,519	490,519	285,999	
収入合計	1,080,582	945,521	796,062	

2. 支出の部

(単位:円)

勘定科目	2016 年度予算	中間決算	2017 年度予算	備考
通信費	40,000	19,789	25,000	会員勧誘切手代 会員請求書発送費, 総会案内はがき代等
Newsletter 印刷費	120,000	64,800	70,000	ニュースレターNo.35
Newsletter 発送費	20,000	63,523	70,000	
行事費	50,000	0	50,000	講師謝金
会議費	25,000	18,714	25,000	弁当代等,
事務費	50,000	60,048	50,000	HP 作業費等
学会業務委託費	440,000	432,000	432,000	(株) ワールドプランニング
備品等	5,000	648	5,000	振込手数料等
小計	750,000	659,522	727,000	
次年度繰越金	330,582	285,999	69,062	
支出合計	1,080,582	945,521	796,062	

*備考欄の会員数: 2015,2016年度の入会率を基に、想定した入会率を現在の会員数に掛け合わせて算出しています。

シンポジウム報告

日時: 2017 年 1 月 21 日 (土) 14:00~17:00

会場: 青山学院大学 青山キャンパス 総研ビル 10 階 第 18 会議室

1) イスラム女性と国際スポーツ — ヴェールをめぐる葛藤と共存性 —

荒井 啓子 (学習院女子大学教授)

「近代スポーツ」が内包する特性 — 「身体の解放性」「非服飾性」と、イスラムのもつ「被覆される身体の文化性」との葛藤が続いている。2012 年に開催された第 30 回オリンピック夏季大会 (ロンドン) において、参加した 204 のすべての国と地域からはじめて男女両方の選手が出場した。これはヴェ

ール着用の条件をもとにサウジアラビア、カタール、ブルネイの3か国の女性選手の初参加によって実現したものであり、「近代スポーツ」がヴェール着用を許容したかのように見えた。しかし、他方、イラン女子サッカーチームは出場が認められず、2016年開催のリオデジャネイロ大会予選においても同様であった。競技種目（特性）によっては、あるいはヴェール着用の仕様によっては、未だ女性のオリンピック大会出場は難しい側面がある。そこで、本報告では、イランにおいて開催された（1993年～2005年：全4回）「イスラーム諸国女性スポーツ大会」（Islamic Countries Women Sports Games⇒第3回より Moslem Women Games）に着目しその開催意図を検証した上で、国際スポーツであるオリンピックにおいてヴェール着用によるパフォーマンスの何が問題なのか、また、オリンピックが文化の多様性や個の尊重とどのように折り合いを付けることができるのか、という点について検討を試みた。

「イスラーム諸国女性スポーツ大会」は、当初、神聖なるムスリム女性の生き方の上に新しいスポーツの在り方を提言しイスラーム諸国間の「連帯と友情」を謳った。また、公の場において身体を覆う文化をもつムスリム女性のためにオリンピック出場を模索しながら競技スポーツの機会をもたらしたとされた。しかし、この大会は、オリンピックをはじめとする国際大会とは異なり国際審判員がいないため、競技レコードが正式に認められない、特にイラン女性は他のイスラーム諸国に比べて国際的な場面で自分自身のパフォーマンスの成果を試すことが出来ない等の問題が指摘され、第3回大会からは名称変更や参加国拡大とともに特にIOCに対してオリンピック参入の働きかけを展開していった。

近年、国際化を標榜するイランでは、アジア大会を始めとして女性の競技スポーツへの志向性は高まっている。特にオリンピックへの参加には意欲的ではあるが、イランの国家体制においてはやはりヴェールを外すことは難しいと考えられる。他方、ヴェール着用によってはオリンピックにおける「近代スポーツ」の種目特性や競技性（混合型球技、格闘技、芸術スポーツ等）を歪めることにはならないかという懸念もある。

「近代スポーツ」の特性を優先するべきであるという意見のある一方で、それをオリンピックの理念である異文化理解や人権あるいはスポーツ権とどのように折り合いをつけていくかという問いかけは、人種・信仰・政治・性・・・という問題が次々に取り払われてきたかのように見えるオリンピックの世界に、幾重にも複合されて投げかけられた新たな課題として検討されるべきであろう。

2) 若手研究者における課題 — ジェンダー差別と「しかたない」論理の再生産

（シンポジウム当日のタイトルは上のようでしたが、原稿をまとめていただいたら下のようになっていました。まとめの内容から現在のお気持ちは下のタイトルに近いと考え、両方掲載しました。）

現場の声をどのようにつなぐことができるか：若手研究者をとりまく問題について

福永真由美（東京大学准教授）

先日、大学の図書館のホールにて、お子さんを「やりとり」するお二人を見かけた。どちらも研究者なのだろうけれども、女性が図書館から出てきて、ホールに待っていた2歳頃のお子さんを、パートナーの方から引き取り、男性パートナーが入れ替わりに図書館に入っていった。時刻は昼の13:00過ぎである。大学院生同士なのだろう。

何かサポートできないかな、と思いながら研究室に戻りかけていたら、妊娠中の大学院生が、憤慨してやや乱暴にガチャリと電話を切っているところに出くわした。保育所がやはり一杯で入れないという。しかし、彼女が憤慨していたのはそのことにではない。「学生という身分では子どもを産むことは贅沢なのだから、普通の共働きの人びとよりも、親御さんなりなんなり、サポートしてくれる人をちゃんと見つけるように、そしてもっとちゃんと制度と戦いなさい、昔はもっと苦労したものなのだから！」と、「至らない」彼女をたしなめてきた、電話先の女性支援相談員に対して憤慨していたのである。

学生という身分で「生む」のは贅沢？それが支援していると仮にも言う人の言葉なのか。それに制度と戦えというなら、もうちょっと違う「戦い方」、むしろ現実的にこの現状の「切り抜け方」を教えてほしい！精神論とか心構えではなくて！そう憤慨しても、保育所が新しく目の前に出来てくれるわけで

はない。ため息をつきつつ、そう言われることに納得いかない、とやはり気持ちが収まらない様子だった。納得いくはずがないのである。というより、納得してはいけないことである。

それでも確かに昔よりは良い。しかし、「漸進している」ことに相対的に満足しているわけにはいかない。子どもを産むか、研究を続けるか、それが選択肢になってしまう事態は、まったくなくなっていない。むしろ、「えいや」で産んだら、産んだことが自分ばかりか、ケアを分担しようとしてくれるパートナーまでも苦難の道に落とし込んでしまう、という逡巡と悩みは、パートナーの育児への理解が進んだ分、実は悩みが深い。

シンポジウム当日、もう少しお話が出来れば良かったと思うのは、このような本当の若手、すなわち、大学院生たちを取り巻く状況にどのような変化がもたらしうるか、という話であった。具体的に何が出来るのか、そのような対処策について、ある限りのお知恵をいただいて持ち帰ることが出来れば良かった。当日、数字を用いながらお示した状況からは、「漸進的に」「相対的に」良くなったと見えるかもしれない状況が、実はそうではなく、「むしろ厳しい」という実感を伴って若手研究者の道の途上に阻害要因をばこばこ産んでいく様子である。リアルな戦略と切り抜け方、それを現行の制度の中で考える手立てがあればこそ、制度との戦い方は具体的に若手研究者の前に現れ得るだろう。為すべきこと盛りだくさん、である。

2017年度第1回役員会報告

日 時：2017年5月9日（火）18:00～19:00

場 所：青山学院大学 総研ビルディング 10階 第18会議室

出 席：国枝、袖井、田原、直井、羽場、原、廣瀬（7名）

議 事：

1. 2016年度会計監査報告について（後述）

資料に基づき、2016年度会計決算報告及び監査報告が紹介された。

2. 会員の動向について

相馬芳枝先生（神戸大学、化学、大阪府茨木市在住）の上京に合わせて、国枝先生がインタビューを行う予定である。

3. 研究会について

5月9日（火）2017年度第1回研究会

大沢真理先生（東京大学）「格差・貧困をどう捉えるか - ジェンダーの視点から -」

次回：調整中

4. アンケート調査について

羽場会長より非常勤講師を対象としたアンケート調査の実施について提案がなされた。関係者の協力を得て、非常勤組合連合（関東、関西に各300人程度の組合員が所属）において実施する方向で検討する。本件は、時間の関係で継続審議となった。

5. 次号ニュースレターの発行について

コンテンツ：総会報告、会計報告、役員会報告

シンポジウム・研究会報告（3月2題、5月1題）、インタビュー記事

6. その他

9月18日（月）13:00～16:00 日本学術会議講堂にて、「学術の再生産が危ない」と題するシンポジウムが開催される予定。羽場会長がJAICOWSの報告を行う。

2016 年度会計決算報告

1. 収入の部

(単位:円)

勘定科目	①予算額	②決算額	差異(②-①)	備考
繰越金	490,519	490,519	0	
会費	590,000	635,000	45,000	110/123人分(89.4%)
利子	63	4	△59	
寄附	0	0	0	
収入合計	1,080,582	1,125,523	44,941	

2. 支出の部

(単位:円)

勘定科目	①予算額	②決算額	差異(①-②)	備考
通信費	40,000	19,789	20,211	請求書発送費, はがき代等
Newsletter 印刷費	120,000	64,800	55,200	ニュースレターNo.34 日本学術関連会員分(393名)を含む
Newsletter 発送費	20,000	63,523	△43,523	
行事費	50,000	26,200	23,800	アルバイト謝金
会議費	25,000	19,712	5,288	弁当代, コピー代等
事務費	50,000	110,505	△60,505	封筒, 請求書作成費含む
学会業務委託費	440,000	432,000	8,000	
備品等	5,000	3,240	1,760	振込手数料等
小計	750,000	739,769	10,231	
次年度繰越金	330,582	385,754		
支出合計	1,080,582	1,125,523		

浅倉むつ子先生に会計監査を依頼し、適切かつ正確であるをご承認いただきました。

今後の活動に関する JAICOWS 会長からの提案

女性科学研究者の改善に向けて、特に若手研究者、非常勤研究者の地位の改善に向けて、今回2つのご提案・ご連絡をさせていただきたいと存じます。

1. 「学術の再生産」が危ない!

シンポジウム、2017年9月18日(月:敬老の日)

青山学院大学総研ビル 12階、大会議室 13:00~16:30

一つ目は、女性研究者の非正規化の現状と、その非正規化の問題点を問うシンポジウムのご案内です。今、研究者、学芸員、司書、非常勤講師など、学術関連専門職の非正規化が進んでいます。こうした専門職の方々の待遇改善なしに、『学術の再生産』は可能なのか?!それを問うシンポジウムが、学術会議の社会学委員会ジェンダー分科会の主催で開かれ、JAICOWSも協力参加させていただきます。プログラムは以下の通りです。(別途封入しておりますポスターをご参照下さい)

13:00~13:10 海妻径子(岩手大学):趣旨説明

13:10~15:00 報告

河野銀子（山形大学／日本学術会議社会学委員会ジェンダー分科会会員）：

女性研究者はどこにいるのか—ジェンダー統計の現状と限界を探る

廣森直子（青森県立保健大学）：非正規化のすすむ図書館職場で専門性は保てるか

—専門職の非正規化が女性によって受け入れられている現状を考える

清末愛砂（室蘭工業大学）：

「女性研究者支援」事業は誰のためにあるのか—研究者の消費と搾取構造を考える

羽場久美子（青山学院大学／日本学術会議会員、JAICOWS（女性科学研究者の環境改

善に関する懇談会）会長：女性研究者の貧困をどう解決するか？

15:15~16:30 質疑応答・討論

現在、シングルマザーや子供の貧困が問われる中、何より女性研究者の貧困と不安定化が、学術の再生産を危うくしている！という点に警鐘を鳴らしていきたいというシンポです。

敬老の日です。ぜひ多くの方のご参加およびフロアからの積極的なご発言、ご提言を、どうぞよろしく願います！ありがとうございます。

2. 国際ジェンダーの会のさまざまな試み

二つ目は、国際ジェンダーの会の報告によって、日本でも、PhD論文のAwardや女性研究者の著書へのAwardまた若手女性研究者に対して学会の機関を通じて、論文の書き方、大学就職のKnow How、女性研究者故の問題や悩みへの対処などサポート体制の試みがなされていけばよいのではないか、という情報共有のご提案です。

現在、アメリカに本部のある7000人を超えるメンバーを数える世界国際関係学会（ISA）の副会長（2016-17）を務めており、その中のWomen's Caucusの執行委員をしております。Women's Caucus International Studies(WCIS)では、毎年、世界中の女性研究者のPhD論文(英語)、およびジェンダー研究の著書(英語)でその年最高の成果を決定しAwardを授けるシステムを取っており、毎年執行委員は夏に大量の論文・著書を読み、その年最高のPhD論文、ないし著書を書いた女性研究者を選び、賞を与えて優れた研究を称え、奨励しています。また昨年から学会の際に、通常の分科会とは別にTown Hall Meetingを開き、集まった女性の若手研究者に対して、PhD論文の書き方、大学で職を得るために、学会報告の仕方、などを執行委員と有志によりラウンドテーブル形式で共同ディスカッションする場を設けて成功しており、特に若手女性研究者に大変感謝されています。今年は年次大会の2月にワシントン郊外のバルティモアで、その後6月にはISAの香港大会で、同様の会合を開き、評価を得ました。

特に香港ではアジアで国際政治を学ぶ女性PhD研究者に対して、PhD取得後の大学での就職について、アジアの女性国際政治研究者のネットワーク形成について、女性研究者の地位の向上について相互にディスカッションし大変有益でした。帰国してからもメールで相談を受けています。

日本でも、女性研究者に特化したPhD論文や著書のAward,また若手女性研究者の育成のため、問題点を集め解決に向け支援するような体制を、各学会の中で作っていければ、孤立しがちな女性研究者にとって力になるのでは、と思い情報を共有させていただきました。

女性研究者、中でも若手研究者は現在でもなかなか正規の職を得るのが困難であり、また任期付きの職が特に若手の間で、准教授さらに教授職にまで広がりつつあります。

後人を育成していくという点でも、また非正規に苦しむ女性研究者が増えているという点でも、JAICOWSもこのような問題にも取り組んでいきたいと思っております。ぜひ皆様のご協力とご理解をお願いいたします。

皆様どうぞ充実した夏をお過ごしください。

JAICOWS 会長 羽場久美子

2017年度第1回研究会報告

格差・貧困をどう捉えるか — ジェンダーの視点から —

大沢 真理（東京大学教授）

日 時：2017年5月9日(火) 19:00~20:00

会 場：青山学院大学 青山キャンパス 総研ビル10階 第18会議室

1. 格差や貧困をどうとらえるか

格差の状況をとらえるのに相対的貧困率（OECD等によれば、等価可処分所得の中央値の半分未満の人の比率）がしばしば使われるが、この概念には批判もある。すなわちそれが「所得貧困」（ある時点でのフローの所得の相対的な水準）に限定されていること、人間関係や社会関係など、生活の質にかかわる貧しさを捉えていないこと、さらに、低所得層の絶対的な生活水準が上がっていても、中位所得が上昇すると貧困率が上昇してしまうことなどである。最後の点は日本では問題が少ないと指摘された。

2. 貧困の状況 — 国際比較、年次推移 世帯類型比較 —

貧困の状況は、用いられる統計データによって異なって見える。低所得者のサンプリングが弱いといわれる全国消費実態調査を使って「貧困率が下がった」とされたりするが、国民生活基礎調査にもとづくOECDのデータでは、日本の貧困状況はどの年齢層でも最悪に近い。また年次推移を見ると1980年代半ばからほぼ一貫して悪化している。そして1980年代の貧困とは高齢者の問題だったが、それ以降、子どもから中年の貧困率が大幅に上昇した。世帯類型別にみると、働く一人親の貧困率がOECD諸国で最悪であること、共稼ぎしても貧困から脱出しにくいことが、日本の特徴である。日本では貧困削減率（政府の所得再分配が貧困を緩和する度合い）が弱いためにOECDで有数の貧困率の高さとなっている。

3. 分配の状況

労働時間当たりの雇用者報酬が1995年より低下し続けたのは、主要国で日本だけである。また所得トップ10%の所得シェアを見ると、日本の格差は小さくはなく、また拡大してきている。その背景には、最近の労働市場において、失業率が低下する傾向がある一方で、非正規雇用比率が急上昇していることがある。非正規の比率は女性が男性より高率なまま推移しており、これはジェンダーの視点からも見逃せない。

4. 税と社会保障制度の特徴

本来ならば所得再分配のメカニズムを通して、貧困率が低下するはずが、逆に日本では低所得者層にマイナスの効果を与えている。とくに社会保険料負担率が、低所得者ほど重くなるという負担の「逆進性」が見られる。それは、税制における「累進性の低下」とあわせて、所得格差をますます拡大する傾向にあるとされる。ボトムにきちんとテコ入れする政策が必要だといえよう。

5. まとめ

「機会の平等」の陰で生まれる「結果の不平等」に晒される人々へ「セーフティ・ネット」を提供するはずであった社会保障制度が、日本の場合、むしろ格差拡大への追い打ちをかける構造となっていることが、明らかにされた。それはまた、最近の福祉国家改革にみられる労働市場への再統合策が、必ずしも経済的貧困の回避につながらない、という点も示唆している。現行の所得再分配システムの建て直しを含めて日本の税・社会保障改革全体を歴史的・横断的に見渡す研究者の視点が、今こそ必要であることが本研究報告からあきらかになった。（文責：廣瀬真理子 直井道子）

次回研究会（2017年度第2回研究会）のご案内

白波瀬佐和子先生と湯村和子先生が講演をお引き受けくださいました！皆様、ぜひ奮ってご参加ください。

日時：11月26日(日) 14:00～18:00 (仮) 詳しくはHPでご覧下さい

場所：青山学院大学 青山キャンパス 総研ビル10階 第17会議室

講師とテーマ：白波瀬佐和子先生（東京大学）「女性内の階層性を考える」

湯村 和子先生(国際医療福祉大学病院) 「高齢化社会の予防医学-老化と健康-」

女性科学者リレー・インタビュー

「リケジョの夢が叶うまで～新しい触媒の発見とカルボン酸の合成」

相馬 芳枝（国連世界化学年の女性化学賞受賞者）



1. 夢の白衣～少女時代、さすらいの心～青春時代

Q. はじめに、先生の少女時代・青春時代についてお話しいただけませんか。ご出身は関西と伺っていますが・・・？

A. 私は山口県生まれ、神戸大学理学部を卒業して公務員試験に合格し、大阪工業技術試験所（通産省の管轄、現在の産総研）に就職しました。1965年（昭和40年）春のことです。当時は合格するとリスト（名簿）が作成されて、国立の研究所から個別に採用の指名があるというやりかたでした。私は中学生の頃から「白衣」に憧れていたもので、白衣を着て実験できる職業に決まって、うれしく誇らしく感じました。

Q. なぜ、白衣が夢だったのですか？

A. 父の家は農家をしていました。私は幼い頃から牛の世話や畑仕事に親しんできました。自然や命に興味がありました。物心つくと、野口英世の伝記やシュバイツァー博士のアフリカの話の本を読んで、医者になりたいと（あるいは白衣の天使の看護師になろうと）思いました。ところが大学受験で医学部に失敗、残念でした。一浪して理学部に進学したのですが、夢が叶わなかった落胆は大きく、入学してからも「迷える子羊」のような状態で、憂鬱な日々を送っていました。

Q. 若い時代は、誰でも憂鬱なものです。心はどこか見知らぬ所へ、あてどなくさまよい、自分にも覚えがありますが、「青春とは」そのような迷える子羊の群れを呼ぶのかも知れません。

A. けれども大学二年目に、小林正光教授の化学実験教室に誘われました。はじめはビーカーを洗う作業や、実験に使う白い粉の重さを量るような易しい仕事しかできませんでしたが・・・この研究室は生き生きとした活気に溢れていて、同級生7～8人で楽しい実験を重ねることになりました。当時めずらしい産学協同のプロジェクトを小林教授は動かしていて、エネルギーな研究活動を進めておられました。

Q. そんな出会いがあったのですね。「迷える子羊」は、めでたく「研究者の卵」の道へ進むことになったのですね。さて、就職後の研究所（現在の産総研）では、何をなさったのでしょうか？

2. 化学者として自立をめざし、生涯の目標に出会う

A. 当時は公害が日本を席卷する大問題でした。水俣病（チッソによる水銀汚染）、イタイイタイ病、大気汚染（光化学スモッグ、イオウ酸化物の発生）、海への流出油による被害などが連日のニュースになっていました。大学も研究所もダイレクトに社会の動きを意識しました。

Q. 1960年代、1970年代の公害は目を覆うようなことばかりでしたね。被害は深まるばかり、汚染地域は広がる一方でした。汚染地域の人々は寝たきりになったり、死亡したり、障害者になったり、いじめられて村八分にされたり、踏んだり蹴つたりの状況でした。悪い時代です。悲惨な報道写真が人々の心に何かを訴えていました。

高度成長の裏側にあるものが可視化され、顕在化された時代です。

A. まず私に与えられた研究は、「公害対策を研究する分析の仕事」です。公害原因の一つである「一酸化炭素（毒ガスの一種）を吸収、除去」する方法の開発です。分析方法について、より性能の高い「高性能な吸収溶液」を見つけ、開発せよ！というミッションでした。

研究レベルは、プロにとっては中程度の課題です。広く知られているように「一酸化炭素は、自動車の排気ガスにも含まれて」います。文献で調べた方法を追試して、さらに新しい現象を見つけていきます。やがて、予測もしなかった「新しい現象」が目の前に出現しました。運が良いとはこのことでしょうか。そして世界初の「銅カルボニル触媒」の発見につながりました。さらに発見された物質を利用して、「高温高圧でなければ」作成できなかった「三級カルボン酸」を「常温常圧で」「コストをかけずに合成できる方法」へとつなげました。これが生涯を代表する触媒の研究へと進んだのです。

（『理科はこんなに面白い』東京図書出版、2014年参照）

これは産業界でも高級塗料の原料や石油化学の会社で利用できるというメリットがあります。すなわち、以前の方法とはケタ違いに「省エネ」で「簡便な」合成方法を開発できたのです。（「銅（I）銀カルボニル触媒によるカルボン酸の合成」『油化学』第30巻第5号参照）第1報から毎年積み重ねて第20報まで研究を進め、さらに30報、40報と発展させていきました。これらは、当初めざしていた公害防止の研究とは枝分かれした高い次元の研究成果となりました。

3. 暗いトンネルでも独自の研究課題を続けて進む

Q. その間、研究費、研究に必要な費用は順調だったのでしょうか？ 私の場合は競争が職場内部で生じると、上司に研究費を横取りされてまったく使えなかった年もありました。いわゆる「狩りの獲物（標的）」にされてしまったのです。女性の研究費は徒党を組んだ複数の男性にねらわれました。

その年は泣く泣く外部の研究費に頼って凌ぎましたが・・・。

A. おっしゃるとおりです。当初の課題を達成し、新しい物質の開発に成功したものの、国立研究所の中では大型研究（ナショナル・プロジェクト）のメンバーにならないと、職場内で評価されません。暗いトンネルの中にいるような状況が十年も続きました。でも、私は、この研究テーマに惚れ込んでいました。手放すことはありませんでした。百万円ばかりの研究費で実験を継続しました。研究所内では女性差別もひどく、実に苦しい時代を過ごしたものです。女性研究者は孤立しやすく、生き延びることさえ困難な場合もあります。

やむを得ず、途中で道を変えた人、職場そのものを辞めた人もいます。女性にとって厳しい世界です。そういう現実を経験した者として、女性研究者を育て、継続的に成果を出せる研究者を増やすためには、備えなければならない環境の整備があります。

4. 猿橋賞を受賞、そしてノーベル・シンポジウムの講演

Q. 大変な時代、忍耐の時代に、先生は猿橋賞を受賞されたのですね。

A. 1986年、暗いトンネルにいた時代に、生涯のエポック・メイキングともいえる猿橋賞をいただきました。精神的に辛かった40代に、もっとも尊敬する科学者である方から評価されたことは涙がでるほど嬉しいことでした。勤務先での評価は変わりませんでした。自覚した(めざめた)研究者としての私は進むべき道(志)を確かめました。

Q. その後、海外で研究発表された業績が認められて、国連の世界化学年「女性化学賞」の受賞(2012年)へつながっていったのですね。

A. 主な業績は二つです。「銅、銀カルボニル触媒の発見と第三級カルボン酸の常温常圧合成法の研究」および「地球の温室効果防止のための二酸化炭素再資源化の研究」です。長い間、チームで追いかけてきた努力が実りました。

Q. 漏れ聞くと、ノーベル賞授賞式にも参列されたことがあると伺いましたが……。

A. はい、ノーベル委員会から1991年に「二酸化炭素の削減」をテーマに、シンポジウムの講演をしてほしいという手紙がきました。当時、産総研ではすでに大型予算を動かしていたので、タイミングも良かったのです。優秀な部下の研究者もいて、国際共同研究も進めていました。

ノーベル・シンポジウムで講演し、授賞式にも出席させていただき、誠に光栄でした。

その後は触媒の研究に立ち返り、部下たちは次々に新しい触媒を発見し発展させました。一連の業績に対して、工業技術院賞(1993年)、科学技術庁長官賞(2000年)、日本化学会学術賞(2002年)が授与されました。このように陽のあたる晩年を過ごした後、2002年に私は定年退職しました。

Q. 20年にわたる苦しい中堅研究者の時代を経て、コツコツと実験を積み重ねてきた学問研究の地盤が、「リケジョ」(理科好きの少女のこと)の夢に翼を与えて才能を発揮させたことはすてきです。

A. 定年後はアウトリーチ活動を行って「理科好き」の子どもを育て、「女子中高生のための関西科学塾」や「茨木市相馬芳枝科学賞」の創設、そして女性科学者の研究環境を良くするための各種の委員会活動を、一人のボランティアとして続けています。

これからも少女のように、夢を追いかけてください。本日はありがとうございました。

(2017年5月28日収録、インタビューは国枝たか子による)

新入会員の紹介

お名前	所属	専門分野
北川 尚美	東北大学大学院工学研究科	化学工学専攻
安信 千津子	日立製作所	情報学
阿久津 典子	大阪電気通信大学工学部	表面界面の統計物理
高安 美佐子	東京工業大学	経済物理学 情報科学
望月 眞弓	慶應義塾大学	薬学
吉田 文	早稲田大学 教育・総合化学学術院	教育社会学
堀 利栄	愛媛大学 理学部 地球科学科	
青野 光子	国立研究開発法人 国立環境研究所	環境学、農学

新規入会者 8名

2017年7月10日現在 会員数 117名

(この号は、桜美林大学大学院の直井が係りでした。)

連絡先： 女性科学研究者の環境改善に関する懇談会（JAICOWS）事務局
〒206-8515 東京都多摩市永山 7-3-1 国士舘大学体育学部 田原淳子研究室
Tel・Fax：042-339-7294（研究室直通）
E-mail：tahara@kokushikan.ac.jp
<http://side.parallel.jp/jaicows/> ★新しいホームページが立ち上がりました！

学会事務センター： 株式会社ワールドプランニング
〒162-0825 東京都新宿区神楽坂 4-1-1 オザワビル
Tel：03-5206-7431 Fax：03-5206-7757
E-mail：world@med.email.ne.jp

郵便振替口座番号： 00100-8-542793
ゆうちょ銀行 〇一九（ゼロイチキュウ）店 当座 0542793
（口座名義）女性科学研究者の環境改善に関する懇談会